

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：33914

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884058

研究課題名(和文) 19世紀フランス文学における物語の手法「予告」と「布石」：ゾラの作品を中心に

研究課題名(英文) "Annonce" and "amorcer" : narrative techniques in 19th century French literature with special emphasis on Zola's fiction

研究代表者

中村 翠 (Nakamura, Midori)

名古屋商科大学・経済学部・講師

研究者番号：00706301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、物語中、後に起こる出来事を予告することによりサスペンスを生む「予告」、及び出来事が起こってから事後的に隠された意味が明らかになる「布石」という語り手法に注目し、これらの機能を考察することを目的とした。研究期間内の成果として、19世紀の自然主義作家エミール・ゾラの作品を分析の中心にすえ、語り手法がいかに変遷したか、草稿も用いながら読み解いた。また小説・戯曲などのジャンル比較を行った結果、これらの手法が各ジャンルに即した形で書き直され、それぞれ初読(初見)と再読(再見)に対応した機能を果たすよう使い分けられていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：My research focuses on the function of two narrative techniques: the "annonce", which provides suspense at the first reading by presenting and foreshadowing future events in a story, and the "amorcer", in which the meaning of these narrative events and devices are only revealed in retrospect or at the re-reading. I examine the two techniques in French naturalist fiction of the late nineteenth century, placing especial emphasis on the fictional works of Emile Zola. Studying Zola's manuscripts and paying close attention to his literary and theatrical adaptations, I show how Zola developed both these techniques within and across multiple generic, material, and receptive contexts. I establish how the functions of "annonce" and "amorcer" in Zola's fiction emerge from his acute awareness of the material specificity of the act of reading and interpretation.

研究分野：文学

キーワード：仏文学 ゾラ 予告 布石 伏線 19世紀 草稿 生成研究

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマは、研究代表者が前年度(平成24)にパリ＝ソルボンヌ・ヌーヴェル大学に提出し学位を取得した博士論文を、新たに発展させる過程で形成された。

まず上述の博士論文では、フランスの自然主義作家エミール・ゾラ(1840-1902)の作品が没後100年以上経っても求心力を失わないのはなぜか、という根源的な問いを出発点とし、サスペンスを生む作品上の構成に注目した。もとより、サスペンスとは、物語内ののちの情報が与えられていない不確定な状態、あるいはその状態を作り出すものという認識が支配的であった。しかしグリヴェルは、読者の期待を生む不確定さは、あらゆる情報を取り除くことではないと論じている(1973)。またヒッチコックは、サスペンスを作り出すには、むしろ観客に可能な限り情報を与えること、と述べている(1975)。ジェラルド・ジュネットは、これらの考え方を具体的な語りの手法の面から考察し、先に起こる出来事を予告することにより期待を生み出す「予告(annonce)」という手法を定義している(1972)。エミール・ゾラの作品には、このような予告が巧みに用いられている。したがって博士論文では、ゾラの作品における予告の問題を語りの戦略としてテーマにすえ、草稿分析も用いながら作家の社会思想と結びつけて論じた。

しかし、その途上で新たな問題が浮上してきた。ジュネットは「予告」と、それとは似て非なる「布石(amorce)」を区別している。「布石」とは、「予告」と同様に物語の出来事をテキスト内で先取りするという形式を持つが、非常に暗示的に組み込まれているため、初めは読者に気付かれることがない。その出来事が起こってはじめて、隠された重要性が回顧的に理解される。この点で、一見良く似た形式を持つ二つの手法は、機能を異にしているが、それにも関わらず先行研究では、未分化のまま論じられることが多かった。

この点に関して考察を深めるうち、研究代表者は、両者を初読と再読の対比と関連づけて考えることが可能であると着想するに至った。初読時に効力を発揮するのは、即時に注意を喚起する「予告」であるが、物語の結末を知った後で再び読まれる際には、もはやサスペンスを生まない。反対に「布石」は、初読時には何の効果も生まないが、筋を知った後にこそテキストに織り込まれた意味の再発見を促し、再読に耐えうる強度を作品に与えると考えられる。そこで、二つの語りの手法を初読・再読の観点から区別し検討することとした。

2. 研究の目的

(1) 具体的な作品内における予告と布石の表れ方を分析し比較することにより、文学作品が初読の際に読者を惹き付けるだけでなく、再読によって新たな価値を発揮するこ

とを明らかにする。

(2) コーパスに関して、19世紀は連載小説が流行した時代であり、新たな読者層となった大衆の関心をひきつけるためにも、この時代の語りの手法には発展が見られる(イーザー、1989)。また、予告と布石は、その予示的な性格のため、執筆前にプロットを定めておくという創作スタイルでのみ活用される。これらの条件を鑑みると、19世紀後半に活躍したゾラは、作品のほとんどがもとは連載小説であり、かつ執筆前に綿密な調査とプロットの構成を行うことで知られている上、両手法が作品中に多く見られる作家である。したがって、ゾラの作品を対象の中心にすえ、分析を進めることとする。

3. 研究の方法

(1) ゾラの初期作品から後期作品に至る全体を通して、予告・布石の例を洗い出し、テキスト内のどのような文脈でどのような機能を果たしているかを分析することで、個々の例の特徴、および全体的な傾向を明らかにする。

(2) ゾラがどのようにこれらの手法を仕組んでいたのか、草稿やヴァリエーション(異稿)の分析を用いた生成研究によって解明する。調査対象となる草稿資料については、『ルーゴン・マッカール叢書』(1871-1893)は、コレット・ベッケルによるトランスクリプション(転記)が第5巻まで発行されているうえ(Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart : édition des dossiers préparatoires*, 5 vols, 2003-)、『叢書』のいくつかの作品はフランス国立図書館によって、『三都市』シリーズ(1894-1898)はメジャー図書館によって、それぞれインターネット上に公開されており、閲覧が可能である。しかし、『四福音書』シリーズ(1899-1903)を含むそれ以外の作品の草稿は、パリ・フランス国立図書館およびゾラ・センターに所蔵されている。よって、これらの資料については、長期休業期間を利用してパリに滞在し、閲覧・複写を行う。

(3) 予告と布石に担わされた機能をより詳しく検討するため、ジャンル間の比較を行う。ゾラの作品は、ゾラ自身やその他の翻案家たちによって他ジャンルに作り変えられることが多い。長編・短編、小説・戯曲の翻案など、同じストーリーが異なるジャンルに移し変えられるとき、両手法にどのような役割や効果が要請され、どのような形式に調整されるのかを考察する。

(4) 本研究の視野を広げるため、同じ時代・地域や他の時代・地域の作家の予告・布石と比較する。これによって、文学作品における普遍的な特徴、時代的な特徴および作家

独自の特徴を考察する。

4. 研究成果

(1) ゾラのキャリアの中で、作品における予告の表れ方がどのように変化したか、テキスト分析を行なった。『三都市』シリーズにみられる予告の変遷期を〔雑誌論文〕で、『四福音書』シリーズ第2巻『労働』にみられる未来社会の予告としての機械のイメージを〔図書〕で、『ルーゴン・マッカール叢書』第8巻における『愛の一ページ』(1878)における時間の錯誤の問題を〔学会発表〕で論じた。

予告と布石との切り分けを可能な限り経験的に可視化するため、平成25年度に京都大学でフランス語フランス文学講読集中講義を担当した折、両手法がみられるゾラの初期の戯曲『マドレーヌ』(1865)を受講者に読ませ、実験テストを試みた。実験テストについては、ウンベルト・エーコが『物語における読者』(1979)で行ったモデル読者の実験を参考にした。これにより、初読による予告の機能、再読による布石の発見がどの程度の効果を発揮しうるのかを、実際にはかることができた。

上記の戯曲『マドレーヌ』は、のちにゾラ自身によって小説『マドレーヌ・フェラ』に翻案されている(1868、1889)。小説から戯曲へ翻案されたゾラの作品が多い中、戯曲から小説へ翻案されたものはこの一作品のみである。この書き換えの際、それぞれのジャンルの鑑賞形態に即してどのような語りの手法の調整が行われたか、比較を行なった。その結果、再鑑賞が比較的困難な戯曲では明示的に描かれていた予告が、再読の比較的容易な小説では非常に暗示的な布石に置き換えられるなど、それぞれのジャンルに適した形で盛り込まれていたことがわかった。この成果と、前述の集中講義で行なった実験結果を盛り込んだ研究内容を、平成26年3月にニューオリンズ大学で開催されたAIZEN国際学会において発表したところ、具体的な実験テストを用いて初読・再読の問題に切り込んだ点で高い評価を得た〔学会発表〕。

(2) 生成研究としては、『ルーゴン・マッカール叢書』第7巻『居酒屋』(1877)の草稿を調査し、予告を担う登場人物の造型を読み解いた。これについての研究論文をフランスの生成研究専門学術誌 *Genesis* に投稿、査読を経たのちに掲載された〔雑誌論文〕。

さらに、平成26年春期および夏期休業期間に渡り、各2~3週間滞在して戯曲作品『マドレーヌ』の草稿を探し求めたところ、ゾラ・センター研究員ジャン＝セバスチャン・マックの協力により、それまで忘れ去られていた草稿の再発見につながった。このこ

とは、ゾラ研究界全体の面から言っても大きな成果をあげたといえる。現在、この草稿資料の分析を進めているところである。

ヴァリエーション(異稿)の分析に関しては、これまでヴァリエーションが作られていなかったゾラの初期作品『死せる女の願い』(1866)をとりあげ、本研究開始時点から調査を行っているが、膨大な時間を費やす細かい作業のため、成果の発表は次年度になると予想される。

(3) 他作家との比較に関しては、ほぼ同時代のフランスの作家フローベール、モーパッサンや、ドイツの作家イェンゼンなどの作品をとりあげ、予告と布石の用いられ方を分析した。この研究内容は、現在所属機関で研究代表者が担当する比較文芸論の授業において還元されている。

(4) ジャンル間の比較研究としては、前述の戯曲と小説についての国際学会研究での発表のほか、ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』第18巻『金』(1891)と、マルセル・レルビエ監督によるこの小説の翻案映画『金』(1928)を比較した。その成果を、それぞれ〔図書〕および〔学会発表〕として発表した。これらの考察が発展した結果、「語りの手法とアダプテーション」という今後の新たな研究テーマの展望につながった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Midori Nakamura, « *L'Assommoir et Mon voisin Jacques d'Émile Zola: étude comparée de la genèse des personnages secondaires* », *Genesis*, 査読あり, No. 39, 2014, pp. 181-198.

中村翠, 「ゾラの後期作品における「予告」: 転換期としての『三都市』」, 『フランス語フランス文学研究』, 日本フランス語フランス文学会, 査読あり, 103号, 2013, pp. 167-184.

〔学会発表〕(計3件)

中村翠, 「アダプテーション作品における機械の表象: Marcel L'Herbier の *L'Argent* (1928)を中心に」, 「19~20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係」第8回シンポジウム, 於南山大学, 2014年12月14日.

中村翠, 「モニュメントのアナクロニズム: ゾラの『愛の一ページ』をめぐって」, 日本フランス語フランス文学会全国秋季大会, 於広島大学, ワークショップ2「近代フランス文学におけるモニュメント-記憶・複製・再創造」, 2014年10月26

日.
Midori Nakamura, « « L'annonce » et « l'amorce » chez Zola : du théâtre au roman », Colloque International AIZEN, University of New Orleans, 2014年3月8日.

研究者番号 :

〔図書〕(計2件)

中村翠、「ゾラと科学技術—『労働』(1901)を中心に」、『近代科学と芸術創造—19～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』、真野倫平編、行路社、2015、pp. 425-444.

Midori Nakamura, « L' « annonce » zolienne: le roman et le cinéma » in *Re-Reading Zola and Worldwide Naturalism : Miscellanies in Honour of Anna Gural-Migdal*, Cambridge Scholars Publishing, 2013, pp. 80-93.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況(計0件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 翠 (NAKAMURA MIDORI)
名古屋商科大学・経済学部・講師
研究者番号 : 00706301

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()